

児童生徒福祉作文集 第41集

たすけあい

ささえあい

ふれあい

令和3年度（2022年2月）

社会福祉法人鹿嶋市社会福祉協議会



「第四十一集」

児童生徒福祉作文集」

の発刊にあたって

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会会長 錦織孝一

今年度で四十一回目を迎える児童生徒福祉作文事業には、市内の児童生徒の皆さんから合わせて1,466編の応募をいただきました。

この事業は、児童生徒の皆さんが家庭や学校・地域社会の生活の中で思いやりの心を持ち、ふれあいの輪を広げ、明るい福祉のまちづくりに参加するきっかけとなることを願って実施しております。

今年度は、昨年延期になった東京オリンピック・パラリンピックが開催されたことを通じて、新たに気づいたり考えたりした助け合いや支え合いについて書かれた作品が多く見られました。サッカー競技の観戦の際にボランティアの方々の活動を見たり、花いっぱい運動などに取り組んだりしたことが、助け合いや支え合いに触れる機会のひとつになったのではないかと感じています。パラリンピック競技を初めて観た児童生徒も多かったと思いますが、ハンディキャップを感じさせず戦う姿に感銘を受けたことが、多くの作品から伝わってきました。

また、今年度はLGBTに関連した複数の作品が初めて寄せられました。作品からは、性的マイノリティを含めた多様性を認め合う社会を望んでいる気持ちやひしひしと伝わってきました。それぞれの良さに気づき、尊重し、さらに認め合っていくという姿勢は、誰もが安心して暮らすことのできる社会のために、欠かせないものと考えております。

当協議会といたしましては、本福祉作文事業が、市民の皆さまの福祉に対する意識向上につながることを願うとともに、共生社会の実現に向け、児童生徒が福祉を身近なこととして捉えられるよう、今後も福祉体験の実施や学生ボランティアの育成に取り組んでまいります。そして、地域福祉活動計画の基本理念である「共に創る みんなで支え合う 福祉のまち かしま」の実現に向けて、市民の皆さまや各福祉団体、ボランティア、行政、事業者などと連携を図り推進してまいりたいと思っております。

結びに、この児童生徒福祉作文事業につきまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆さま並びに福祉作文の審査にあられました委員の皆さまに心から感謝を申し上げます、発刊のあいさつといたします。

目次

発刊のことば

社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会会長

錦織孝一

最優秀（小学生の部）

おじいちゃんのアシ

おとうとのはると

かぞくがふえる

わたしの大ばあ

みんなのユニバーサルデザイン

パラリンピックを観て思ったこと

豊郷小学校 一年

大同東小学校 二年

鹿島小学校 三年

大同西小学校 四年

鹿島小学校 五年

鹿島小学校 六年

谷田川

森本

菊池

立原

櫻井

子安

菜

拓

柚

真

悠

蒼月

哉

奈

乃

生

最優秀（中学生の部）

ユニバーサルデザインについて

不完全な言葉

となりのおばあさんと伯父

鹿島中学校 一年

鹿野中学校 二年

鹿野中学校 三年

山脇

諸星

君田

惺

陽

環

太

里

人

最優秀（高等学校生の部）

自閉症の兄から学んだこと

私にできる心のバリアフリー

鹿島学園高等学校 一年

鹿島高等学校 二年

笹沼

辻本

麻

佑

楓

佑

10

9

7

6

5

4

3

2

2

1

1

【鹿嶋市障がい者福祉計画において「障害者」を「障がい者」と標記することで統一しています。本冊子もそれに準拠するかたちで標記させていただきます。】

優 秀 (小学生の部)

わたしのたいせつなせいちゃん

あいさつをだいじにしよう

はじめての学校

わたしの高そぼ

人と人のつながり

みんながくらしやすい未来

小さい力が集まれば大きな力になる

戦うべき本当の相手

在宅医りようという選択

あいさつ＋(プラス) 笑顔は最高の武器

広がれ笑顔

おばさんから学んだこと

鉢形小学校 一年	塚原穂乃	11
大同西小学校 一年	横田愛音	11
鉢形小学校 二年	高田杏莉	12
中野東小学校 二年	吉村雪姫	13
鹿島小学校 三年	横田莉里羽	13
大同東小学校 三年	菊楽奏介	14
三笠小学校 四年	井上想	15
鉢形小学校 四年	高田夏空	16
鉢形小学校 五年	内野こはる	16
大同西小学校 五年	立原樹季	17
鉢形小学校 六年	久田心琴	18
大同西小学校 六年	立原初葵	19

優 秀 (中学生の部)

だれもが住みやすい街
いじめと思いやりについて
笑顔にするために
差別をなくし平等にするために
勇気を出して伝えてみることに
もっと知ってほしい

優 秀 (高等学校生の部)

親切とは
今の私たちにできること
コロナによる人権問題

佳作入選作品

児童生徒福祉作文応募数

あとがき・児童生徒福祉作文審査委員

33	32	30	28	27	26	25	24	23	22	21	20
あとがき・児童生徒福祉作文審査委員	児童生徒福祉作文応募数	佳作入選作品	山本美羽	根本大輝	小野寺里桜	小嶋哲史	出清水珠莉菜	中蘭未来好香	青木麻桜	水田孝真	高野杏子
			鹿島高等学校 二年	鹿島高等学校 二年	鹿島高等学校 一年	大野中学校 三年	鹿島中学校 三年	平井中学校 二年	高松中学校 二年	鹿野中学校 一年	鹿島中学校 一年

最優秀（小学生の部）

おじいちゃんのアシ

豊郷小学校 一年

谷田川 蒼

ぼくのおじいちゃんは、しごとがやすみのひは、にわのきのえだをはさみできています。きよねんの十二がつ、おじいちゃんがいつものように、きやたつにのつてきのえだをきつておるときに、すべつてきやたつからおちてしまいました。

おじいちゃんのひだりあしは、どんどんはれて、あおむらさきいろになつてしまいました。ぼくは、おじいちゃんがあるけなくなつたらどうしようと、とてもしんぱいになりました。

おじいちゃんは、おかあさんとびょういんにいきました。おじいちゃんのおひだりあしは、こつせつしていました。それからのおじいちゃんには、けがをするまえには、ふつうにできていたことができなくなりました。たとえば、おふろにはいるのに、おばあちゃんやおかあさんのてですけがないとできません。

ぼくは、おじいちゃんのためになにかできることはないか、かんがえました。ぼくは、いもうとと、おふろでおじいちゃんのせなかをせつけんであらつてあげることになりました。おじいちゃんは、ぼくたちがせなかをあらつてあげると、

「ありがとう、たすかるよ。」

と、いつてくれました。

ぼくは、いままで、おじいちゃんにこうえんにつれていつてもらつたり、おふろにいれてもらつたりしていたけれど、ぼくにもおじいちゃんのためにできることがあるんだな、とおもいました。

おじいちゃんのひだりあしは、いまはすっかりなりました。おじいちゃんは、またいつものように、にわのきのえだやはつばをきつています。ぼくは、そのしたで、はつばをあつめています。これからも、おてつだいをしつて、おじいちゃんのわらつておるかおをみていきたいです。

おとうとはる

大同東小学校 二年

森本 菜月

わたしのかぞくのことを、しようかいます。わたしのかぞくは、お父さん、お母さん、わたし、妹、弟が二人の六人です。一ばん下の弟のはるには、びょうきがあるので、とくべつなおせわがひつようです。じぶんでいきをすつたり、はいたりができません。そのため、人こうこきゆうきをつかっています。おうちでは、お父さんと、お母さんがかんごしさんです。

お父さんやお母さんがおせわでいそがしいときに、わたしは、じぶんでできるお手つだいをしています。おさらあらいやお風ろそうじをしたり、せんたくものをたたんだりしています。はるとのお風ろの時かんになると、お風ろのじゅんびのお手つだいまします。お風ろに入つてお時はるとは、とても気持ちよさそうです。

お手つだいのほかに、はるととあそんでいる時かんはたのしいです。

す。また、絵本を読んであげたり、はるとの手をにぎったりだっこをしてあげたりすると、目をぱちぱちとしてよろこんでくれているようで、わたしは、うれしいです。

ときどき、たいちようがわるくなり、びょういんにゆういんするころがあります。その時は、とてもさみしいですが、元気になってかえって来てくれると、とてもうれしいです。今もまた、にゆういんしてしまいました。はやく元気になってかえって来てほしいです。そうしたらまた、いっぱい絵本を読んだり、お手つだいやおせわをしてあげたりして、はるとによろこんでもらいたいと思います。

はるとがうれしいと、わたしも、かぞくもみんなしあわせな気持ちになります。なので、これからもたくさんお手つだいをし、はるとといっしょにたのしくあそびたいと思います。

かぞくがふえる

鹿島小学校 三年

菊池拓哉

ぼくんちに家ぞくがふえた。ぼくのお姉ちゃんが今年けっこんしたから、お兄さんが一人ふえた。そして、お姉ちゃんのおなかには、赤ちゃんがやどっている。よていでは、九月に生まれてくると聞いた。ぼくは、四人兄弟のすえっ子だからお兄ちゃんになれるかと思って、よろこんでいたら、

「たっ君は、おじさんになるんだよ。」

と言われて、

「え!?おじさん?だっておじさんって大人の人がなるんじゃないの?」

と、おどろいてふしぎな気持ちになった。

ある朝、ぼくは、赤ちゃんに名前をつけてみた。男の子だったら、「りく君」、女の子だったら、「なつみちゃん」。お姉ちゃんに話してみたら、「いいよ。」

「いいねえ。たっ君は、名づけ親だね。」

と言つて、よろこんでくれた。ぼくは、うれしくなって、お姉ちゃんのおなかをさすってみたり、声をかけたりした。そのたび、おなかのなかでうごいているらしく、まるで、よろこんでいるみたいだ。おなかの赤ちゃんは、女の子らしい。だから、まい朝、ぼくが、「なつちゃん、おはよう。」

と、お姉ちゃんをおこしにいくと、お姉ちゃんは、

「ポコポコポコって、うごいているんだよ。」

と言ひ、赤ちゃんもへんじをしているみたいだ。「早く生まれてこないかなあー。」ぼくも家ぞくも、まちどおしいという思いと、「なくなったお姉ちゃんが生まれかわってきたらいいなあ。」という思いで、九月が楽しみだ。

わたしの大ばあ

大同西小学校 四年

立原柚奈

わたしの大ばあは九十五才です。少し前までは自分の足で歩いていましたが、去年転んでしまい、歩くのがこわくなってしまいました。そのため、ベッドですごす日びが続き、大ばあのでや足は、どんどん細く

なっていました。転んだときにできた顔のきずも、まだくつきりとのこっています。食事のりようもほとんど少なくなっていました。

元気がなく、力をなくした大ばあのために、ベッドのわきにトイレをおいたり、車いすを用意したりと工夫しました。かたいものも食べにくくなっているの、やわらかい物にしたり、小さくきざんだりして出しています。そして、のどにつまらせることがないように、食べ終わるまで、ずっと見守ります。わたしだったら、食べたい物も食べられず、やわらかい物しか食べられないことはつらいのに、大ばあは何でわらってられるんだろう、と思いました。

大ばあは、デイサービスに行つて、お風呂に入ったり、運動したりしています。デイサービスに行くことは、大ばあのためだけでなく、家族が休む時間にもなっています。そうすることで、つかれがとれて、また大ばあのお世話ができる体になっていきます。デイサービスのおかげで、大ばあは手すりにつかまりながら、少しだけ歩けるようになりまして。トイレも一人ですわれるようになった大ばあのがたを見て、「やったあ！」と思いました。また、歩くことをあんなにこわがっていたのに、すごいなと思いました。

そんな大ばあについて、悲しいことがあります。年をとってきた大ばあが、わたしたちの名前をわすれてしまうことがあり、遊びに行つた時に、「あれはだれだっけ？」

と聞かれることです。そんな時は、大きな声で名前を答えます。そうすると、ちゃんと思いで出して、え顔を見せてくれます。そんな大ばあを見ると、家族のことを大切に思っている気持ちが伝わってきてうれしくなります。年をとつてもわすれることのない、強いきずなでむすばれているんだな、と思いました。大ばあは、デイサービスのごはんより家で食

べるごはんの方がおいしいと言っています。わたしは、その理由を考えてみました。ばあちゃんが食べさせてくれたり、みんなのえ顔を見ながら食べられたりするからかな、と思いました。大ばあは、家族という時間をとても大切に思っていて、ずっといっしょにいたいと思っているのかな、と思いました。

わたしたちは、帰る時に、「また来るよ。」

と言つて、必ず大ばあにタッチをします。大ばあの手は、とても大きくて温かいです。その手は、「また来てね。」「待っているよ。」「手伝いありがとう。」という思いを伝えてくれるみたいです。また、がんばって生きていることが伝わってきます。大ばあが教えてくれた家族のきずなを大切に、ずつとつないでいきたいです。

みんなのユニバーサルデザイン

鹿島小学校 五年

さくら
櫻井真乃

家族で遊びに出かけた時、いろいろな場所で階段のとなりにスロープがあることが気になっていました。弟が赤ちゃんの時、ベビーカーを押すのにとっても便利でした。

スロープなどの様々な人に役立つっているものは、ユニバーサルデザインの考え方だそうです。調べてみると、実に多くのものに使われています。

例えば、シャンプーのボトルのポンプの部分と側面には、ぎざぎざが付いています。これは、目が不自由であろうとなかろうと、だれにとつ

でも便利なデザインです。目をつぶっていてもぎざぎざをさわることで、リンスと区別することができます。

東京オリンピックで話題になったピクトグラムも、ユニバーサルデザインの一例です。数多くの競技種目が、すべてピクトグラムで表されていました。人の動きが分かりやすく表現されていて、おもしろいと思いました。

外国の方にとって非常に役立つユニバーサルデザインといえば、ピクトグラムだそうです。非常口やトイレ、エレベーターのマークなどが当てはまりません。確かに、日本に来た時に日本語が読めない人達にとって、ピクトグラムがあれば、それが何を示しているのか、すぐに理解できるでしょう。

そもそも、ユニバーサルデザインとは、年れいや能力、状況などにかかわらず、できるだけ多くの人が使いやすいように、製品や建物、環境をデザインすることだそうです。

私たちは知らず知らずのうちに、ユニバーサルデザインが使われた物や場所を利用しています。それほど、私たちのくらしに自然な形でとけこんでいるのです。家の中を少し探しただけでも、たくさんのユニバーサルデザインが見つかるということを、今回初めて知りました。

ユニバーサルデザインはバリアフリーと比べても、作り直しに必要なエネルギーが少なく、環境への負担を減らすことができます。環境問題にもきちんと配慮していて、地球にやさしいデザインであるというのはいずれだと思います。

ユニバーサルデザインを利用するうえで、自分にできることを考えてみました。

例えば、スロープを通るときには家族や友達と横に広がって歩いて道

をふさがないようにしたいと思います。エレベーターや多目的トイレは、必要な人のためにゆずるようにしたいと思います。

多くの人に役立ち、くらしやすいように考えられているユニバーサルデザインですが、物や設備が整っているだけでは、まだ十分ではないと思います。人々がおたがいに思いやりをもって、ゆずり合ったり助け合ったりすることで、すばらしいデザインを生かすことができるのだと思います。

パラリンピックを観て思ったこと

鹿島小学校 六年

子 安 悠 生

東京オリンピックも終わり、次はパラリンピックです。

最初は、オリンピック・パラリンピックの開きには国民にも反対されていきました。しかし、開きいたら自分でも思います。とてもよいオリンピック・パラリンピックでした。特に、自分はオリンピックより、パラリンピックのほうが気になりました。知的障がいや手のまひ、普通の人とはちよつとちがう体で出場している選手がいました。自分は、「なぜ体が不自由でもスポーツをあきらめないだろう」と選手の気持ちについて疑問をもちました。なぜかを少し考えてみました。選手の気持ちになって。しかし、答えは簡単でした。出場して勝ちたいという気持ちが強いです。自分がやっているゲーム、スポーツなどにも勝ちたいという気持ちがあります。たとえ障がいがあっても、障がいについてなにを言われようとも、負けずに活やくできる可能性がある場所、それがパラリンピックなのです。目が見えなくても競泳をしたり、耳が聞

こえなくてもマラソンや三段とびをしたりする。不自由でも努力をすれば活やくができるのです。目が見えなくてもコーチからの合図で三段跳びをする選手や、知的障がいがあっても、陸上や競泳をする選手もいました。普通の人の普通が一部できなかったり、普通の体だったけれども途中で障がい者になったり、もしくは生まれつき不自由な体の人でも努力をし、あきらめない心をもっていれば、パラリンピックというのは出場できると自分は思いました。

僕の妹は重度の障がいがあって、運動や意志そ通がむずかしいです。もちろん、パラリンピックなど夢の話です。でも、そんな妹の障がいも一つの個性だと思っています。いっしょに楽しめることも行ける場所も限られているけれど、それも個性だと思っています。障がいの形はいろいろあるけれど、パラリンピックに出ている人も、その家族も、前向きに障がいと向きあっています。

障がいがある人も無い人も、もっているものは可能性です。その可能性を育てるのは、本人だったり、周りの人の協力だったりするのです。ぼくに直接できることは、すぐには思いつきませんが、「これから先、いろいろな個性をもった人達を支えられる人になれたらいいな」と、この夏のパラリンピックや、家でマイペースでのんびり過ごしている妹の姿を見てそう思いました。



最優秀（中学生の部）

ユニバーサルデザインについて

鹿島中学校 一年

山脇 惺太

僕がこの題名にした理由は、小学四年生のとき、総合的な学習の時間で福祉について調べる学習で、身の周りにある「ユニバーサルデザイン」について調べたのを思い出したからです。「ユニバーサル」という言葉は、「すべての人向け」という意味をもっています。つまり、ユニバーサルデザインとは「どんな人でも使えるようにしたデザイン」ということです。「ユニバーサルデザイン」の例を調べました。オリンピック・パラリンピックで使われている「ピクトグラム」は、ユニバーサルデザインの、それぞれの競技に対応しているシンボルです。ある特定の言語を使わないで、どの国の人でも競技を特定できるようにシルエットの絵が描かれています。信号機もユニバーサルデザインです。音が出たり、LEDで点灯したり、いろいろな工夫がされています。音が出るのは、周りが見えづらいお年寄りや視覚障がいのある人が、安全に横断できるようにするためです。電球式の信号機は、日光が当たるとどの色が光っているのか見えづらくなるときがあります。LEDを使うことで光っているのが見やすくなり、見間違いも起こしにくくなります。これは、どんな人にも伝えるための工夫です。自分の国だけ、身体が不自由な人だけにしかわからないことがあると格差ができてしまいます。障

がいがある人も健常者も同じように生活できるようにしよう、という考えをもつ人たちが掲げたのがユニバーサルデザインです。僕の身近な生活の中にある、普段は気づかないユニバーサルデザインを探してみました。

一つ目は、パソコンにありました。大体のキーボードは、FとJのキーに細長い出っ張りがあります。この出っ張りはキーがどこにあるのかを知るための目印になり、目が不自由な人もパソコンで文章を打つことができます。また、これはキーボードをいちいち見ないで、速く文章を打つためにも役立つています。

二つ目は、電灯のスイッチです。両手に荷物を持っているときや、手などに怪我をしているとき、小さなスイッチでは押しづらいかもかもしれません。スイッチを押すタイプの大きいものにする事で、肘でも楽に押せたり、力が弱くても押しやすくなります。

三つ目は、シャンプーの容器の刻みです。シャンプーの容器には、目を開けられないときでも触ったらわかるように、出っ張っている部分があります。僕はいつも、この容器の出っ張っているところを触ってシャンプーとリンスを区別しています。

四つ目は、エレベーターです。エレベーターは怪我をしている人、車椅子を使って移動している人など、階段を登れない人やエスカレーターを使えない人たちが建物の階層を移動することができる手段です。健常者と同じように移動できるので、エレベーターはユニバーサルデザインといえます。それと、大体のエレベーターの中には鏡があります。車椅子を使っている人が後ろ向きになって降りるときに、後方の安全を確認しながら進むことができます。

僕は、健常者として暮らしています。それでも、身の周りにはたくさんユニバーサルデザインがあることがわかりました。また、このよう

な工夫は僕にとつてはあってもなくてもいいものばかりで、あまり重要性がないように感じていましたが、「これがないと生きていけない」と思うくらいの死活問題をもっている人たちもいるので、ユニバーサルデザインはたくさんの方が一緒に暮らしていくために必要な考え方なのだと、とても感じました。

不完全な言葉

鹿野中学校 二年

諸星陽世里

「やばい、また赤くなってないかな。」

そう考えるのと同時に、鼓動が激しくなり、手足が震え、喋ることもおぼつかなくなる。やがて耳まで真っ赤になり、その時の私は何も考えることができない。思考が停止してしまう。これは、人前に立っている時の自分。いわゆる、「社交不安障害」または「あがり症」というものだ。

私は、一人で家にいる時に電話がかかってくる時、インターホンが鳴ったりしても、出ることができない。大好きな楽器の演奏も、人の前でやろうとすると、震えてしまい上手くできない。また、小学校で登校班会議があった日、自分の同級生には班長がおらず、年上の子達に混ざって発表するのが怖くて早退した時もあった。そして、人前に立つことや、リーダーになることをいつも避けていたのだ。

しかし、学校生活では人前に出ないといけなことがたくさんある。体育や総合の発表、日直、コンクール、実技テスト、避けて通りたいけれど、これらをすべて避けていたら、友達や先生にも嫌われてしまうと思ひ、小学校の頃からほとんど参加してきた。発表をしているときはも

ちろん手足口が震え、顔が真っ赤になり、呼吸も速くなる。歌のテストではいつも、上手く声を出すことができない。注目されて顔が赤くなり、「リンゴみたい。」

と言われることもあった。今では自分でそれをネタとして振る舞うことができるが、言われた当初はともシヨックだった。自分のことを見る目が怖い。

私のことを励ましてくれる、応援してくれる人もいる。ありがたいはずなのに、どうしてももうっとうしいと思ってしまう。「私の気持ちなんか分からないくせに」と。「陽世里なら大丈夫」と言われても余計プレッシャーになる。せつかく応援してくれているのに。胸が苦しくなる。こういった時に、「言葉や心のつながりとは、何て不完全なものなのだ」と思う。相手が自分のことを想ってくれていることは確かなのに。このような声かけは、他の場面でも課題になっていると思う。

例えば、電車に車椅子の方が乗るとき、駅の方は気遣ってすぐにスロープを出してくれる。しかしこの時に、周りの人のためにと思っただけの方が、

「ご迷惑をおかけしますが少々お待ちください。」

と言っているのを聞いたことはないだろうか。私たちは自然な言葉だと感じているが、車椅子の方はどうだろう。自分が迷惑になっていると言われているように思い、不快な気持ちにならないだろうか。言葉以外にも、障がいのある子が近くにいたりする時や黒人の方がいる時など、ジロジロとずっと見ていないだろうか。これは、海外の人が日本に来て差別国だという理由である。日本には黒人の方が少なく、障がいのある方を見かけることもあまりないので、悪気がなくてもどうしても珍しいものに興味を示してしまう。そして、「しょうがい」を漢字で書いた時に、「害」

という文字が入るのはなぜだろう。彼らは何の害も与えていないのに。このような、言葉、心のつながり、行動など、人々にはさまざまな課題がある。たとえ相手のことを想っていても、それが裏目に出ることもある。だから、自分も相手の立場になった時のことをいつも考えていることが大切だ。福祉とは、人と人との心の繋がりのうえでできた幸せのことだと私は考えている。互いに温かくなれる言葉や行動ができるようになれば、それは「最高の福祉」であると思う。

となりのおばあさんと伯父

鹿野中学校 三年

君和田 環 人

「あけましておめでとう。」

そう言っただけ、私の伯父はくしゃくしゃの千円札をポケットから出した。

伯父が元気だったころの私の最後の記憶だ。

母につれられて病院へ面会に行った。あの頃元気だった伯父の姿は、そこにはなかった。たくさんの管につながれ意識のない伯父がベッドに横たわっていた。

しばらくして、自宅に戻った伯父に会いにいったが、伯父は簡単な言葉の受け答え以外に会話をすることができなくなっていた。言葉がうまく出ない障がいが残ってしまったのだ。そう、私の伯父は障がい者になった。

母が言うには、障がいのある人は、生まれつき障がいがある人と、後から障がいを負った人に分けられるということだ。伯父は後者だ。私は、このとき初めて障がいを負うことは誰にでも起こりうるのだ、と自覚

した。半年前の伯父は流暢に私に人生を語っていたのだから、どうなるかなんて誰にも分からないことなんだ、と私は知ることができた。

夏休み、再び伯父に会いに行った。伯父は、なんとか自宅で一人暮らしをしていた。言葉や記憶の障がいがあっても、伯父は、なんと一人で生活ができていた。私は、伯父に尋ねてみた。今どういう生活を送っているのかと。

「たくさんの人が助けてくれる。」

途切れ途切れに伯父は答え、一冊の「連携ノート」というものを見せてくれた。そこには、伯父の生活を助けてくれるたくさんの人々の手により日々の様子が記載されていた。看護師、介護士、ケアマネージャーなど、医療や福祉の専門家が名を連ね、伯父の健康や生活を見守り、助けてくれていた。私は、このような役割をもつ人々が実際に何をしているか知らなかった。だがこの日、私は伯父のサポートをしてくれる人々の活動を目の当たりにして驚いた。伯父に今の生活をどう思っているのか尋ねた。伯父は笑顔を見せ、自信に満ちあふれた態度で、

「誰かに助けてもらって生きるのもいい。」

そう言つて、今の生活に満足している様子だった。

そんな話をしていると、伯父の家のおばあさんが訪ねてきた。夕食用にと野菜の天ぷらを揚げて持ってきてくれた。とても美味しそうな天ぷらだった。聞くと週に一、二回食事を届けてくれたり、伯父の欲しい物を買に行ってくれたりしているらしい。私はこの人の心のやさしさに感動し、そして感謝した。おばあさんは、

「だれかの役に立ちたいと思っている。」

と私に話してくれた。

私は、この近所のおばあさんのように、人に優しく誰かのために行動

できる人に、そして、たくさんの専門家のように、伯父の健康や生活を見守り助けてあげられるような、優しく立派な人間になりたいという気持ちで心がいっぱいになった。

そんな気持ちを私は、伯父とおばあさんに伝えた。だが、意外な言葉が返ってきた。

「あなたも伯父さんを支えるチームメンバーなのよ。こうして訪ねてきてくれることが、伯父さんにとつての楽しみであって生きがいでもあるのよ。」

とおばあさんは言ってくれた。私は、自分の存在を誇りに思った。こうして訪ねて、伯父とコミュニケーションをとることが伯父の助けになることだったんだ、と理解し、今後も続けていこうと心に決めた。

それから二ヶ月、私は週に二、三度伯父の家を訪ね、学校であったことなどを話している。以前とは少し変わってしまったが、変わらず私を出迎えてくれる伯父がいることがうれしい。そして、たくさんの人に支えられながら伯父は生活をしている。これは特別なことだけれど、当たり前のことだ。お互いに支え合いながら生きていく。これが本来の人としてあるべき姿だと私は思う。そして、今日も私は連携ノートに伯父の様子を記載する。



最優秀（高等学校生の部）

自閉症の兄から学んだこと

鹿島学園高等学校 一年

笹沼 楓

障がいのある方を取り上げていたテレビを見て「可哀そう」と言う人がいます。視聴者がそう思うのは、偏見などの心理的バリアがあるからではないでしょうか。身体に障がいがあるというだけで周囲から心配され、不幸だと言われることに疑問を感じます。

私の兄は、軽度の「自閉症」という障がいがあり、今年の春に特別支援学校を卒業し、現在社会人です。仕事をしながら教習所に通い、頑張っています。

特別支援学校では、生徒一人一人の自立と社会参加を目指し、個人やニーズに応じた教育をしていました。私も、何度か支援学校に行ったことがあります。どの生徒もみんな笑顔でのびのびと学校生活を送っていて、社会に出るために真剣に学んでいる姿に私は感心しました。そんな学校に通っていた兄も卒業後の就労に向けて、職業実習などたくさん経験を卒業しました。

私は、兄を「可哀そう」と思ったことは一度もありません。むしろ「頑張れ」と思っています。

障がいと診断されるまで、育児が大変だったと母から聞いたことがあります。コミュニケーションが取りにくく、「おかたづけ」の言葉やス

ケジュールが変わることでパニックを起こしたそうです。けれど、障がいがかつてからは、主治医の先生に相談し、療育や作業療法を受けさせたり、写真や絵カードで一日のスケジュールを伝えたりしたそうです。時間はかかりますが少しずつできることが増え、現在では身の回りのことを自分で行い、社会人になり仕事も責任を持ち、少しでも人の役に立ちたいと思いつつ日々頑張っています。何よりも優しい心をもち、家族を笑顔にしてくれます。私と将来の話をすることもあります。

そんな兄と一緒に生活する中で、腹が立つことや悲しいこともありました。心無い言葉で嫌な思いをし、傷つきました。小学生の時、上級生に誘われて兄は知らない所に連れていかれ、置き去りにされ、泣きながら帰って来たこと。どれほど悲しく悔しかったことだろう。「可哀そう」と言われたくないから、涙を我慢した時もあるかもしれません。同じ人間なのに、排除しようとする友達の態度を、とても冷たく感じたことを覚えています。

幸せの形は、人それぞれです。普通であることが幸・不幸の判断になっているのは、とても悲しいことだと思います。そして、健常者が普通で障がい者は例外として扱われる社会に寂しさを感じます。健常者が障がい者か、幸せか不幸か、そんなことで命の価値は変わりません。人間に「普通」も「例外」もあるはずがありません。障がいには不幸ではないこと、誰もが夢をもつていいこと、ハンデは「特長」であり、「特徴」ではないことを文字で、言葉で伝えていきたいです。

幼小中、特別支援学校の教育を通じて心身共に発達し続ける兄の姿は、私の進路に大きな影響を与えました。現在、私は高校一年生です。将来、心理カウンセラーを目指して進学したいと考えています。「人の心に寄り添える人になりたい」私がこのような夢を抱くようになったの

は、兄の存在があったからです。私のほうこそ、兄から「頑張れ」と励まされています。

そして、私はこれからも、兄と共に生きる。瑞々しく生きていく。

私にできる心のバリアフリー

鹿島高等学校 二年

辻本麻佑

私は自分が心の病にかかるまで、知っているようで何一つ理解できていなかった。「不登校」。周りの人からそう言われている人達に、「何か事情があるだろう」と思っていたものの、心のどこかでは「何で来られないんだろう」という気持ちもしつかり抱いていた。

私は、高一の秋に人間関係のこじれで人に会うのが難しくなってしまうことがあった。人の視線が恐くて、半年以上登校できなかった。それどころか、家から出るのも苦難だった。そんな状況を変えてくれたのは友達だ。私が学校に行けなくなつて三日。何人かの事情を知らないクラスメイトから連絡がきた。一週間。連絡をくれる数は半分に。一ヶ月。さらに半分に。「心配」という連絡がほしかったわけではない。むしろ、返信すら苦痛に感じてしまっていた。完璧主義な私には、どんなに仲が良くても信頼している友達にも相談するという選択肢がなかった。だから、「大丈夫」という本当の気持ちと裏腹の言葉を携帯に打つのが苦しくてしょうがなかった。私は、次第に連絡をとることすらやめてしまった。人に会うのが怖いから学校に行っていない。学校に行くという普通のことできてない自分に、どんどん嫌気がさしていった。でも行けない。会いたくない。怖い。いろいろな気持ちでぐちゃぐちゃにな

り、考えるのすら疲れてしまった。今まで唯一の味方だった両親も、「このままでは」という議論で言い争いが増えていった。私を思ってくれているからこそ、というのは理解していても、親もいっぱいいたい、自分自身を知っている、と言われなくても」と反抗的になってしまっている。さらに嫌気がさしていった。両親と言いつ争いになったある夜、自分の部屋に入った瞬間、勝手に涙が出た。考えないようにしていても、考えてしまう時間がある。自分でも、もう何がなんだか分からなく、気づけば何も知らない友達に泣きながら電話をかけていた。私の話を何も言わずに聴いて、よりそってくれた。その時、気持ちが楽になるとともに、「人の視線」というどう見られているかの私の不安が少し晴れた気がする。私のことをちゃんと見てくれていた人もいる。恐い視線だけではないんだ、と。そこからいろいろな人と、また連絡をとることから始めて、少しずつ人との関わりを増やして、また登校することができた。

今、私は「学校に行けない」という経験をjして、良かったと本当に思う。学校は、休まずに登校できる方が良い。しかし、学校に来られない人の気持ちや、人に会うのが恐い人の気持ちにどうよりそうかを学べたこの経験は、こういう経験をしている人でなくては分からない特別な感情。私は、これから生きていく上で、周りに私と似た感情を抱いている人の不安を晴らす力になれたらと思う。

また、「不登校の人は何で来られないんだろう」と抱いていた気持ちが変わった。学校に来られない事情があるから来ていない。でも、来ていないから楽なわけじゃない。私は、自分が学校に行けなくなつて初めてこのことが理解できた。来られないと行きたくないは違って、皆がそうであるわけではないが、「行きたいけれど来られない」という理解されるのが難しい感情を抱いている人は少なくないと思う。だから、学校

に行けなかったことがあり、その気持ちを分かってあげられる私は「苦しかったね」と、よりそっていききたい。

私は人間関係で苦しんだ時、学校に行けなかった時の気持ちを苦しい過去として捉えるのではなく、その分、似た境遇に立っている人達の支えになっていきたい。これは誰にでも分かる気持ちではないからこそ、その気持ちによりそえる、という経験した人にしかできない支えになりたい。

優 秀 (小学生の部)

わたしのたいせつなせいちゃん

鉢形小学校 一年

塚原穂乃

わたしには、六さいはなれたおとうとがうまれました。ずっとおとうとがほしかったので、おかあさんのおなかにあかちゃんがいるときいたときは、すぐくうれしかったです。

おかあさんのおなかもどんどん大きくなり、あるひうまれました。コ罗纳でびょういんにいけず、すぐにはあえませんでした。たいいんのひ、わたしはがっこうだったので、ドキドキしながらいそいでかえりました。かえると、すぐちいさくて、かわいいおとうとがいました。あしもつめもぜんぶがちいさくてビックリしました。おかあさんにささえてもらいながらだっこをしました。わたしがよる、はじめてみるくもあ

げました。ちいさいくちで、ゆっくりとぜんぶのんでました。

わたしは、ずっといっしょにいたかったので、

「よるはなくから、ちがうへやでねようね。」

とおかあさんにいわれましたが、いっしょのへやでねました。あかちゃん、なんかいもないておきました。おかあさんはたいへんだな、とおもいました。

だから、わたしは、おせんたくをたたんだり、おさらをさげたり、おかあさんのおてつだいをしました。あかちゃんはかわいいけど、たいへんなこともたくさんあるんだ、とはじめてしりました。

「わたしもたくさんいた？」

ときくと、お母さんは、

「たくさんいたよ。でも、すぐくわいかったよ。」

とえがおでおしてくれました。すぐくうれしかったです。わたしも、おとうとおおきくなったら、おしえてあげようとおもいます。そして、たくさんだっこして、たくさんかわいがってあげたいです。おとうとは、いまのわたしのたからものです。

あいさつをだいじにしよう

大同西小学校 一年

横田愛音

わたしのおかあさんは、あいさつをしっかりしましょう、といつもいつてきます。でも、「なんでしないといけないの？」っておもいます。

わたしの学校の校ちようせんせいは、あさ学校のものに、え顔でたっています。ちよつぴりはずかしいけど、大きなこえで、

「おはようございます。」
という、

「おはようございます。」

とかえしてくれるので、あさからとてもうれしいきもちになりました。

このあいだ、ひとりでおかいものをしました。レジのおばちゃんに、

「おねがいします。」

といっておかねをはらうと、

「なんねんせい？えらいね。」

といわれて、ところがほわっとしました。わたしは、大きなこえで、

「ありがとう。」

といいました。

わたしのクラスのせんせいは、じしゅがくしゅうを十ページやると、
がんばったごほうびにノートにシールをはってくださいます。せんせいから
ノートに、「よくできました」とメッセージがかいてあると、わたしは
「もつともつとがんばるぞ」っておもいます。

わたしもみんなによるこんでもらいたいです。わたしは、おかあさん
にげんきちゅうにゆうのハグをしています。おかあさんは、うれしそう
に、

「ありがとう。」

といつて、おいしいごはんをつくってくださいます。わたしもうれしいので、

「いつもごはんをつくってくださいありがとうございます。」

とてがみをかきました。

あいさつでところがうれしくなったり、みんなをげんきにしたり、ほ
んとうにまほうみたいだな、とおもいました。おもいやりをたいせつに
していききたいです。

はじめての学校

鉢形小学校 二年

高田杏莉

わたしは、一年生のころ、小学校にしているお友だちがいなくて、
ふあんで学校にあまり行きたくありませんでした。学校に行く時間にな
ると、いつもないてしまい、おかあさんやおとうさんをこまらせてしま
いました。

おとうさんもおかあさんも、しごとをしていて、あさはいつもそが
しくしています。たいへんなのに、わたしのために、学校へ車でおくつ
ていってくださいたり、つう学ろをいっしょにあるいてくれたりしました。
ほかにもいろいろなことをしてくれましたが、なかなか自分から学校へ
行く気にはなれませんでした。

あるあさ、学校へいこうとげんかんをあけると、たんじんの先生がい
えの前までむかえにきてくれて、いっしょにとう校してくれました。と
てもびっくりしました。でも、すごくうれしかったです。それから、
少しだけ学校に行ってみようと思いました。

がんばって学校へ行っていると、お友だちがどんどんふえていって、
たのしくなっていきました。そして、なかよしのお友だちができて、休
み時間にダンスをおしえてもらって、おどるのがとてもすきになり、学
校生かつがたのしくなっていきました。

わたしが絵をかいていたとき、

「じょうずだね。」

と、ほめてくれてうれしかったです。

学校は、先生や友だちがささえてくれるところなんだと思い、あんしんしました。まい日がどんどんたのしくなつて、べんきょうにも力が入るようになりました。今では、つたえたいことができるようになりました。なり、友だちとたすけあつて生かすことができるようになりました。

これから、わたしと同じような友だちがいたら、やさしく話しかけてあげたり、いっしょにあそんだりしてあげたいです。

わたしの高そぼ

中野東小学校 二年

吉^{よし}村^{むら}雪^ゆ姫^{づき}

わたしは、百二さいのおばあちゃんとすんでいました。おばあちゃんは足を二回こつせつし、車いすですごしていました。いつも、わたしが車いすをおしていどうしていました。おばあちゃんは、ときどき、

「こわい。」
といい、おこつてしまうときもありましたが、

「ありがとうね。」

といつてくれるときもあり、わたしは車いすをおすのがたのしかったです。わたしは、おばあちゃんといっしょにごはんをたべたり、テレビをみたりしてすすまい日が、たのしくて大すきでした。オムツこうかんのおてつだいをしたり、でんどうベッドのうごかしかたをおぼえたりしました。ときどきおばあちゃんの大すきなおすしを、いっしょにたべに行くのがたのしかったです。でも、だんだんたのすきだったごはんがたべられなくなつてしまいました。そんなある日、わたしがおふろにはいろいろとした時、おばあちゃんのいきがとまつてしまいました。わたし

は、ものすごくびっくりしました。いそいでおかあさんが、しんぞうマツサージをしました。びょういんの先生をよびましたが、おばあちゃんはそのまま目をあげませんでした。

おばあちゃんがしんじやつたので、すごくさびしくなりました。百二さいのおばあちゃんとすすまい日は、たのしくしあわせでした。

人と人のつながり

鹿島小学校 三年

横^{よこ}田^た莉^り羽^{りは}

やさしくて大すきなひいばあちゃんがなくなつて、今年の夏で二年がたちます。夏がくると、ひいばあちゃんといっしょにもちつきをした楽しい思い出がうかんできます。ひいばあちゃんは、いつも周りの人のことを考える人でした。つかれていてもいっしょにあそんでくれたり、自分で育てた米や野さいを人にくばつたりと、周りの人がよろこぶのを一番よろこんでいました。そんなひいばあちゃんもなくなる二年前は、ずっと入院していました。わたしは、会いたくて、よくお見まいに行きました。わたしが顔を出すといつもよろこんでくれ、いっしょにリハビリの体そうをしたり、お茶を飲ませてあげたりしました。そんなとき、いつもきまつてひいばあちゃんは、

「ありがとう。」

と言つてくれ、わたしの心があつたかくなつたことを今でもおぼえています。そのときは、小さくてよくわからなかつたけれど、今思うと、いっばいあそんでくれたひいばあちゃんを、少しだけ助けてあげられてすごくうれしかったです。できるなら、またいっしょにもちつきがし

たいな、と思います。

今、わたしがすむ鹿嶋市だけでなく、日本では、新がたコロナウイルスですごく大へんなじょうきょうになっています。そのせいでわたしたち小学生も、いろいろなことをがまんしながら毎日生活しています。でも、こんなときだから、一番近くにいる家族との時間がたくさんあります。今、ひいばあちゃんには会えないけれど、いっぱいいっしょにすごして助けてもらい、わたしも助けてあげて、たくさん思い出があるから、会いたいけどさびしくはありません。だからみんなにも、こんな大へんなときだからこそ、家族や友だちと助け合って、いい思い出が一つでも多くのこるよう、まわりの人との時間を大切にすごしてもらいたいし、わたしもすごしていきたいです。

みんながくらしやすい未来

大同東小学校 三年

菊 樂 奏 介

ぼくのひいおばあちゃんは、八十八才です。ひいおばあちゃんの家に行くときは、いつもたくさん話したり、遊んだりしてくれました。いっしょには住んでいないけれど、小さいときからいつも身近に感じる感じがいます。

しかし、そのひいおばあちゃんが「とっ発せいまつしよう神けいまい」で、顔の左がわが動かせなくなっていました。まばたきができないから目がかわいてしまったり、食べるときも思うように口を動かさないの、食べたい物も食べられなくなっていました。また、何年も前から目も見えにくくなっていたり、足も弱くなっていました。

たりしているため、歩くときはつえを使って歩かなければなりません。

ひいおばあちゃんと歩いていたときに、ひいおばあちゃんが立ち止まったことがあります。ぼくにとってはひくいだんさも、足が悪いひいおばあちゃんにとっては、こわいものだったのです。なので、ゆっくりと手をひいて、いっしょにだんさをこえました。

ひいおばあちゃんとの時間の中で、自分がふ自由なくできることも、お年よりや体にしようがいがある人たちにとっては、とてもむずかしいことがたくさんあることに気がつきました。自分にとってはとくに気にならないだんさや、つるつるとした石のゆかは、つえを使っているお年よりや車いすを使っている人にとっては、そこを通るだけでもたいへんです。

ひいおばあちゃん他に、お年よりや体にしようがいがある人たちのためにも、ぼくには何ができるのかを考えました。道やお店でこまっとうと思えます。また、お年よりや体にしようがいがある人たちにとって、たいへんなことに目を向けて生活し、もつと理かいを深めたいです。ぼくたちも、お年よりや体がふ自由な人たちも、みんながくらしやすい町や世の中になってほしいと思います。



小さい力が集まれば大きな力になる

三笠小学校 四年

井上 想

「想、大じょう夫？荷物持ってあげるよ。」

ぼくは、三回こっせつをしたことがある。学校に着くと、いつも荷物や水とうを持つてくれる友達がいる。毎日送りむかえをしてくれるお母さんがいる。しようこう口から荷物を持つてくれるお姉ちゃんがいる。飲み物やおはしを持つてきてくれる妹がいる。おふろに入れてくれるお父さんがいる。じゅ業中に心配して助けてくれる先生がいる。たくさんの人にささえてもらって、学校に通っていた。

だから、四年生になって友達がケガをしている時に、「助けてあげたい、こうしてあげると楽かな？」と考えるようになった。ぼくもしてもらったように、荷物を持つてあげたり、い動する時や階段だんをおりる時にかたをかしてあげたりした。買物に出かけた時に、落ちた物を拾えないおばあさんの荷物を拾ってあげたりもした。

みんなに、

「ありがとう。助かったよ。」

と言われて、ぼくは何だか気持ち良かった。

そして、ぼくは気がついた。「ぼくが手伝うことはほんの少しだけど、手伝ってもらう人は、一人一人に少しずつ手伝ってもらうだけで、こんなに生活しやすくなるんだなあ」って。

ぼくもこっせつしていた時に、たくさんの人にささえてもらっていたから、いつもと同じように学校にも通えだし、食事もお風呂に入ること

もできた。みんなに手伝ってもらえてうれしかったし、たくさん感しゃもした。

だから今は、仕事でつかれて帰ってくるお母さんの力になりたい、と思つた。ぼくは兄弟で話し合つて、家のシャッターをしめている。妹はテーブルをふいて、おはしをならべている。お姉ちゃんは、洗たく物たみをしている。だからお母さんは帰つてくると、

「みんなありがとうね。助かるー。」

とよろこんでくれて、いつもより早くごはんを食べることができる。そのあとに、トランプだつて、ゲームだつて、みんなで楽しい時間を過ごすことができる。

小さな一つ一つの力は、大きな力になる。今コロナで、学校もおでかけも行けないけれど、一人一人がしっかりと手あらいやマスクをして、小さな一つ一つのきまりを守つたら、大きなコロナウイルスにもまけない力になると思う。

だからみんなを守りたい。

外出しないで家で勉強している。

大切な人を守ることができるよう。

病院で働く人がコロナにならないよう、コロナでくるしむ人がもういなくなるよう、一人一人の小さな力は人をささえる大きな力になるということを、今がしょうめいするときなんじゃないか、つてぼくは思う。

戦うべき本当の相手

鉢形小学校 四年

高^{たか}田^だ夏^そ空^ら

ぼくはこの夏、戦うべき相手を見つけた。

夏休みになって、コロナウイルスについて考える時間がふえた。感染者がふえている中、感染者への差別も起きていることを初めて知った。

差別という言葉は聞いたことがある。差別はいけないことだ、というのも分かる。だけど、今までぼくは関係ないことだ、と人ごとのように思っていたからか、実感がわかなかった。

差別を受ける人たちの中には、家族が医りようじゅう事者というだけで、学校の行事に参加させてもらえない子供もいると知った。ぼくの家族にも医りようじゅう事者がいる。どうして医りようじゅう事者というだけで、差別を受けてしまうのか、悲しみと、腹立たしさがこみ上げてきた。

家族で差別について話し合った。ぼくは、今までの自分の行動や発言をふり返ってみることにした。ぼくは、コロナがとてもこわい。それは、亡くなる人がたくさんいるからだ。だからぼくは、「コロナがうつるから」と物にさわることや、人ときより気をするようにになっていた。今、考えるとぼくの行動や発言も、もしかしたら知らないだけかをきずつけていたかもしれないと感じた。もし、自分がコロナに感染したとき、悪口を言われたり、さけられたりしたら、とても悲しくて辛い。ぼくは、ウイルスがどうやって人へうつるのか調べることにした。ウイルスはさまざまなけい路から、ぼくたちの体の中に入り込んで来ることを

知った。感染するけい路には、せきやくしゃみをすいこんで感染する飛まつ感染、ウイルスの付いた手で、自分や他の人の目・鼻・口をさわって感染するせつしよく感染、人の口から出たウイルスが、空気の流れによつて広がり、他の人がすいこんで感染する空気感染などがあると知った。だけど、他にも分かったことがある。それは、マスクや手洗いうがい、部屋のかん気などの大切さだ。ぼくたちが毎日している予防をすれば、きよくたんにコロナをおそれる心配もなくなるかもしれない、と思えるようになった。

差別が起きてしまうのは、心配や不安の大きさからだと思う。だけど、ウイルスについて理解を深めたことで、心配や不安を小さくすることができると学ぶことができた。医りようじゅう事者だって、ぼくたちと同じ一人の人間で悲しいことや泣きたい時だってあると思う。ぼくは、医りようじゅう事者だからといって差別はぜつたいしない。みんなが同じような気持ちになれば、コロナをやつつけられると信じている。

ぼくたちが戦うべき本当の相手は、人ではなくコロナウイルスなんだから。

在宅医りようという選択

鉢形小学校 五年

内^{うち}野^のこはる

五年前、とても元気だった私のひいおばあちゃんが、がんになりました。病気が見つかった時は、もう手おくれみたいでした。お母さんは、ひいおばあちゃんにはがんだとは言いませんでした。ひいおばあちゃん入院せず、自宅で静かにくらししていました。

でもある日、ひいおばあちゃんが、

「体がつらい、入院したい。」

と言いました。お母さんは、病院が大きらいなひいおばあちゃんが入院したいって言うなんて、よっぽどつらいんだろうな、と思ったそうです。でも、入院するみたい院はできないということを、お母さんは知っていました。「どうしたらいいんだろう」と思ったお母さんは、ケアマネージャーをしている友達を思い出し、連絡することにしました。お母さんは、なんとか入院せずに自宅で最後までくらせないか相談しました。友達は話を聞いてくれて、

「在宅医りようはとでも大変よ。その覚悟はある？」

と聞きました。お母さんは、

「ある。大丈夫。」

と言いつりました。友達は、

「わかった。すぐ手続きするね。」

と言いつ、これからやらなければいけないことをいろいろ教えてくれました。

まず、在宅医りようの先生、かんごしさん、ヘルパーさん、役場のかご福祉課の人を連れてきてくれ、要介認定の申請も手伝ってくれました。役場で介認定がされると、医りよう用のベッドやヘルパーさんの利用料金が介認定で使えます。

お母さんの友達がすばやく手続きしてくれたので、介認定用ベッドはすぐにとどきました。かんごしさんやヘルパーさんも、すぐに来てくれるようになりました。お母さんは、お医者さんやかんごしさんが家に来てくれるようになったので一安心でしたが、ひいおばあちゃんの病気は、日に日に悪くなっていきました。食事はとれなくなり、点滴だけになり

ました。うとうとと、ほとんど一日中寝ていて、お医者さんが、

「あと一週間ぐらいですね。」

と言いました。ひいおばあちゃんはお医者さんが言ったとおり、うとうとと眠ったように亡くなりました。お母さんが在宅医りようを決断して、たった二週間のことでした。

病気になつてしまつたら、病院に入院して治りようをし、それでも治らなかつたらそのまま病院で亡くなるものだと思つていたけれど、ひいおばあちゃんの死をおして、それ以外の方法もあることを知りました。そして、それに関係している人がたくさんいることも知りました。

私はしよ来、このことに関係した人達のような、誰かのために寄り添えるような仕事がしたいです。だから、困つている人がいたら助けたら、力になつてあげたりできるようにしていきたいです。

あいさつ

(フランス)

+ 笑顔は最高の武器

大同西小学校 五年

立原樹季

みなさんは、知らない人に「あいさつ」をしますか。名前もどこにすんでいるのかも知らない人にです。

私のお母さんは、誰にでも「あいさつ」をします。とは言つても、朝の登校時、いっしょに歩いて学校まで行く時のことです。自転車で通きん途中のおじさん、通学中の高校生、スクールバスを待つている学生さんにです。なに気なく、

「おはようございます。いつてらっしゃい。」と声をかけます。通りすぎた後、

「知っている人なの？」
と聞くと、

「いや、知らない人だよ。」

と言います。私は、少しはずかしい気持ちになります。なぜ、知らない人にあいさつするのかと思うからです。

私は、五年生から集会委員会に入りました。活動の中に、あいさつ運動があります。委員が早く学校へ行き、登校する他の児童に、

「おはようございます。」

と声をかけます。時には、地域の方や民生委員の方が参加してくれ、いっしょにあいさつ運動をします。たくさんの「おはようございます」のあいさつが飛び交うなかで、笑顔がうまれます。そのあいさつ運動が終わった後は、充実感があります。体が温かくなり、一日がスタートできます。その時の声かけは、全然はずかしくありません。

朝の登校時、知らない人にあいさつするお母さんも、あいさつで気持ちいい一日をむかえられるよう声かけしているのだと思うようになりました。初めは、なぜ名前も知らない人にとっと思っていたのが、毎朝同じチュエーションのなかで、同じ「おはようございます」の言葉だけです。通きん途中のおじさんも通学途中の学生さんも「おはようございます」と共に笑顔をかえてくれます。

私の通っているプールで、耳の不自由な方がいます。他の方とのやりとりで、会話が不自由だと知りました。それがわかると、なおさら言葉をかけてはできません。でも、笑顔でおじぎすると応えてくれました。言葉を交わすのと同じように、相手も笑顔でおじぎをしてくれたのです。それが、あいさつとなり、会うたびに笑顔とおじぎであいさつを交わすようになりました。

「あいさつ」とは、人と人をつなぐものだと思います。たとえ、見ず知らずの人でもあいさつから笑顔がうまれました。言葉を交わさなくても時には、その笑顔があいさつがわりにもなりました。笑顔が心を開き、気持ちを温かくしてくれます。笑顔は、人の体温まで上げてくれるのかもしれない。

「あいさつ」という心で、「笑顔」をつなぐ社会でありたいです。

広がれ笑顔

鉢形小学校 六年

久田心琴

「会いたかったよ。あ、かみ切ったんだね。すごく似合う。」

夏休みが明けた最初の朝、久しぶりに会った友達は、はじけるような笑顔でそういつてくれた。

けれど、私の短くなったかみには秘密がある。私は、夏休みにヘアドネーションをしたのだ。

ヘアドネーションというのは、病気や薬、事故でかみの毛を失った人のためにウィッグを作って提供する活動だ。提供する相手は大人だけではなく、子供もいる。

私はヘアドネーションのことを、看護師で自分も寄付したことのあるいところから聞いた。聞いてすぐに、

「やってみたい。」

とあって、夏休みに挑戦したのだ。

いつもとはちがう美容院で、ちよつときんちようしながら鏡の中の自分を見ていた。

美容師さんは私のかみを細くたばねていって、ひと束ずつ大事そうに切り取っていった。いつもなら、はさみの音と一緒にぱらぱらと床に落ちていくかみの毛は美容師さんの手の上だ。三十センチ以上も切ることにしたのでどうなるんだろうと思っただけ、鏡の中の私はショートカットに大変身だ。

切り終わった後、切ったかみの毛を持って写真を撮った。ホームページにのるのだそうだ。こうして切ったかみは、十人分から二十人以上も集めてやっと一つのウィッグができると聞いてびっくりしたけれど、仲間がたくさんいるようでわくわくした。

この話をしたら先生は、

「同じ子供なのに、かみの毛がないなんてかわいそうって思ったから
ちよう戦したの？」

ってきいたけれど、全然ずれている気がする。

私のこの夏のボランティアは、困っているかわいそうな人を助けるためのもではなくて、病気やけがとがんばって戦っている仲間への応援だ。ボランティアって、こんなふうに、自分のできることで人を応援して、笑顔を広げていくことなんじゃないかと思う。

私のかみの毛を使ったウィッグをつけたその子が、大好きな友達とひさしぶりに会えた時、私と親友のように、

「会いたかったよ。かみの毛すごく似合うね。」

って、とびきりの笑顔で喜びあってくれるといいなと思う。九月になって急にすずしくなって首の後ろがスースーするたびに、そんな光景を想像してにやにやしてしまう。

おばさんから学んだこと

大同西小学校 六年

立^{たち}原^{はら}初^{はつ}葵^き

私のおばさんは、耳が聞こえづらいです。そのため、数年前から補聴器を付けています。補聴器を付けるまで、耳が悪いことに私は気づきませんでした。補聴器を付けていると、ある程度の音は聞こえるのですが、聞こえにくい音もあるそうです。特に今はコロナ禍なので、マスクで人の声が聞き取りにくくなっていると話していました。また、お店などでは、ビニールカーテンで店員さんの声がより聞こえにくくなっています。そのためおばさんは、店員さんに何度も聞き返したり、聞かれたこととは違うことを答えていたりすることがあります。すると、店員さんによく顔をされることがあります。私は、そんな店員さんを見て、なんでそんな顔をするんだろうと思います。耳が聞こえにくいことは、見た目では分かりにくいのですが、よくない顔をされるのは、いやな気持ちになります。

そんな時、お母さんが、耳が悪いことを伝えると、申し訳なさそうな顔をする人もいます。そして、聞こえるような大きさで言い直してくれたり、謝ってくれたりします。そんなやりとりをしていると、後ろに並んでいる人たちに、じろじろ見られることもあります。

でも私は、そんなおばさんを恥ずかしいと思ったことはありません。なぜなら、いつも私のことを大事に思ってくれていて、私もおばさんのことを大事に思っているからです。それから、保育園の先生が言っていた、

「みんな違ってみんないいんだよ。世界におんなじ人なんていないんだから。」

という言葉をおぼえていなかったからです。初めておぼさんが耳が悪いと知った瞬間に、頭の中にこの言葉が浮かび上がってきました。それと同時に、聞き取れなかったら、私がおぼさんのために伝えてあげよう！と思いました。当たり前のことだけれど、それを進んでやるのが一番大切なんだと思いました。それ以来、おぼさんが聞き取れない時は、私が耳の代わりになって、おぼさんがよく聞こえる声の大きさや速さで伝えていきます。それでも聞き返された時は、つい乱暴に言ってしまうこともあります。そんな時は、おぼさんの気持ちになってみます。聞きとれていないから聞き返しているだけなのに、相手が怒っているのです。もし自分だったら悲しいし、聞こえにくいことが悔しいです。耳が聞こえにくいことはおぼさんが悪いわけではないので、責めることは間違っていると感じました。

おぼさんのように、見た目だけでは不自由なことがある人だと判断できないこともあります。そのため、悪気はなくても、嫌な思いをさせてしまうことがあるかもしれません。どんな人に対しても、「大丈夫ですか」と声をかけられるような、思いやりの心をもっていきたいと思いました。誰もがそのようになれば、みんな支えあっていける社会になると思います。

「みんな違ってみんないい」

この言葉のように、相手のことを知り、それぞれの良さや個性を認め合っていける人になりたいと思います。

優 秀 (中学生の部)

だれもが住みやすい街

鹿島中学校 一年

高野杏子

七月、私の祖母が肺の手術を受けました。発熱が続いて体調が悪かったため、病院で診察を受けたことが始まりです。レントゲンをとってみると、左側の肺に炎症があることが分かりました。そこで、左の肺を五分の一切除する手術を行うことになりました。手術は成功しました。しかし、手術が成功して終わりではなく、リハビリをしなくてはいけません。切除した肺の五分の一は再生できませんが、残りの肺の五分の四はリハビリで大きくすることができるようです。術後三ヶ月から半年までに、ゆつくりと長い距離を歩くりハビリをして、どれくらい負荷をかけてリハビリをしてきたかによって、肺の五分の四の大きさの変化に繋がります。祖母は前から、畑仕事をしたり、ウォーキングをしたりと運動をしていたので、手術後にリハビリで歩くとなっても、毎日涼しい夕方に歩こうと決めて健康な状態を作っていました。三キロメートルも歩いたときもあり、前向きに健康な体づくりを行っているんだと思います。

この間、テレビで、スポーツ施設から帰っているお年よりの方に取材しているのを見ました。取材を受けていたお年よりの方は、年齢に関わらず明るく元気で、楽しく健康な体づくりを行っているように思いました。私は、他のスポーツ施設も、お年よりの方が利用しているのか疑問

に思い、近くにあるスポーツ施設について調べてみることにしました。

銚田市には『とつぷ・さんて大洋』というスポーツ施設があります。

『とつぷ・さんて大洋』は、楽しみながらの健康づくりで、介護予防・生活習慣病予防のための運動を行うことができる場所です。子どもからお年よりの方まで楽しく健康な体づくりを行うことができます。

鹿嶋市にも、幅広い世代が健康な体づくりを行うことができるスポーツ施設『高松緑地公園』があります。『高松緑地公園』には、野球場やテニスコート、プールなどがあります。プールは、高齢者や身体的に障がいのある方のための機能訓練用プールと、一般および高齢者用プールが一年を通じて利用できる屋内プールとして設けられています。幅広い世代が一年を通じて利用できる屋内プールとして設けられています。幅広い世代が、使いやすく健康な体づくりを行うことができます。

私は、健康な体づくりのための運動をしている人の年齢について、更に調べてみることにしました。『第二次健康かしま21（令和三年度〜令和七年度）』の後期計画の資料によると、運動習慣がある人の割合は、男性も女性も二十歳から六十四歳より、六十五歳以上のの方が高いことが分かりました。お年よりの方の運動の意識が高く、健康な体づくりをしていると思いました。

スポーツ施設は、介護予防にも繋がり、健康な体づくりができることが分かりました。病院以外にも、スポーツ施設で運動をして、健康な体づくりをしていくことも大切なんだと感じます。そう考えると、鹿嶋市には、健康な生活を送ることができ環境が整えられていると思います。資料のように、お年よりの方が運動をして健康な体づくりを行っているのも、スポーツ施設などの楽しく使いやすい施設が身近に設けられているおかげだと思えます。スポーツ施設のように、幅広い世代の世代が楽しく健康な体づくりができる施設が増えると、私たちにとって

も、お年よりの方にとっても、住みやすい街になると思いました。そんな街にするためには、みんなが健康でいられる住みやすい街に必要なことを一人一人が考えて、形にしていくことが大切だと思います。皆さんは、住みやすい街にするためにどのようなことが必要だと思いますか？

いじめと思いやりについて

鹿野中学校 一年

水田孝眞

私の人生や性格は、一つの出来事によって変わりました。それはある男の子からのいじめです。最初は悪口だけで「かわいいものだな」と軽く考えていました。そこからさらにひどくなっていき、心身ともに苦ししい思いをした数年後の現在では、いじめこそ無くなりましたが、私と似たような思いをしている人は世界中にたくさんいる現状に対して「悲しい」という感情を抱いたことから、この作文を書こうと思いました。

現代では、スマートフォンやインターネットが発展し、便利な反面、大きな事件や犯罪にまきこまれる可能性が高くなりました。事件には、匿名での誹謗中傷が多く、犯罪には詐欺や脅しが多い印象です。これらの事件や犯罪には、いじめに分類されるものも少なくありません。また、まきこまれたほとんどの人は不安や恐怖、後悔などの感情にしみつけられ、最悪の場合、死という選択肢を選ぶこともあると思います。学校上でのいじめで苦しんでいる人もいれば、インターネット上での問題に苦しんでいる人もいるということを考えてみると、この世の中は「いじめであふれかえっているな」と思いました。いじめは、意図的に始まるものも少なくありませんが、全てが意図的に始まっているものではあ

りません。いじめは人々の直感や、その時の感情によって何の前触れも

無く始まることが多いため、防ごうにも防ぎようの無いものだ、と私は考えます。私の時も、何の前触れも無いいじめが始まったことがあります。いじめは防ぐことは難しいけれど、いじめられている人を守ることはできません。最近では、見て見ぬふりをする人が多くなりました。見て見ぬふりをする方の人は「いじめられたくない」や「楽だから」などいろいろ思っているかもしれませんが、いじめられている人もいじめられたくないのは同じです。支えがほしいからこそ、見て見ぬふりをされることがわかっていても、助けを求めてしまうのです。そのことをふまえて考えてみると、見て見ぬふりをする人も加害者で、それと同じにいじめにつながっているのではないかと思いました。本当に直感で思っただけなのでちゃんとした理屈は出せませんが、一に行動、二に言動、三に加害は見て見ぬふりをする人の主な行動となっていると私は考えます。行動は見て見ぬふりが多く、言動は、加害者に合わせた言葉が多いです。加害はその名の通りです。どうしたら、これらの見て見ぬふりを無くすることができるのでしょうか。私は一人一人が思いやりをもって日々を過ごさない限り、ほとんど不可能に近いと考えました。なぜかという、助けたいという気持ちがあつたとしても、一人一人の思いやりと行動力が無ければなにもできないと思つたからです。これをふまえて、私は見て見ぬふりをしないような人間になりたいと思いました。

次に思いやりについてです。「思いやりと云えば何か。」と聞かれれば優しさで答える人が多いのではないのでしょうか。しかし、私は優しさよりも行動力だと思います。なぜかという、前にも書いたように、行動力が無い限り、優しさがあつても何もできないと思つたからです。優しさも生きていく中では必要だけれど、行動力はさらに大事ということが

改めてわかりました。

私は、これらのことをふまえて、見て見ぬふりをしないために、行動力を少しずつつけていこうと思いました。

笑顔にするために

高松中学校 二年

青木麻桜

小学校のとき、敬老の日に何度か老人ホームでダンスを披露したことがあります。また、老人ホームでダンスだけではなく、始めのあいさつやお祝いのスピーチもしました。老人ホームでダンスを披露すると決まったときはとても楽しみでしたが、今までのことがないスピーチなども任されたので、とても不安でした。家でスピーチの内容を考えているとき、お年寄りの方々が言われてうれしい言葉や言葉づかいに気がつけていました。実際に始めのあいさつや、お祝いのスピーチをするとき、とても緊張しましたが、笑顔ではきはぎと、聞き取りやすい声で話すことができたのでよかったです。また、私の話を聞いてくれているお年寄りの方々が介護士の皆さんがとても優しい表情で、うれしそうにしていたので、自然と私も笑顔で、気楽に話すことができました。

私は、ダンスを五曲披露しました。一曲目はかつこよく、一番難しいダンスでした。ダンスを踊っているとき、お年寄りの方々が、介護士の方々が集中して見てくれていたのでとてもうれしかったです。二曲目、三曲目では、ゆったりとした曲でした。ダンスもあまり難しくないので、老人ホームの皆さんが振り付けをまねして一緒に踊ってくれました。皆さんがとても楽しそうに踊っているのを見て、私もいつも以上に

楽しく踊ることができまし、緊張もほぐれました。四曲目はサビが盛り上がる元気で明るい曲です。明るく楽しい曲なので、老人ホームの皆さんが手拍子をしてくれました。皆さんがずっと笑顔で見てくれて、「すごい」や「楽しい」などの言葉が聞こえてきたことが、とても印象に残っています。このような言葉を聞いたとき、すごく心が温まりました。五曲目は、老若男女問わずその場にいる全員が知っている曲でした。私たち出演者全員で踊る最後の曲です。みんなが知っている曲なので、私たち出演者だけではなく、お年寄りの方々や介護士の方々も一緒に歌を歌ってくれました。ほかにもダンスを踊っている人や、手拍子をしている人などもあり、とても楽しかったです。

ダンスの披露が終わってから写真撮影を行いました。私たち出演者がお年寄りの方々の近くにいったとき、皆さんから、

「上手だったね。今年年生なの？」

と気軽に話しかけてくれました。お話するのは少し緊張したけれど、皆さんがダンスを見て楽しんでくれたことをあらためて気付くことができました。写真を撮っているときも、老人ホームの方々が幸せそうな笑顔をしていたので、やってよかったなと思いました。また、お年寄りの方々と触れ合い、お話をして、老人ホームの印象がすっかり変わりました。前までは、もっと暗い雰囲気なのかと思っていたからです。そして、皆さん元気で生き生きしていたのを見てうれしくなりました。

私はこの体験を機に、いろいろな方々を笑顔にするために、ボランティアにたくさん参加したいと思いました。そして、皆さんが楽しんでくれる幸せな時間を作っていききたいです。

差別をなくし平等にするために

平井中学校 二年

なかその みらいよし
中 蘭 未来好香

私はこれからの社会を平等にするために、差別をなくしたいです。みんなもそう思っているのに、なぜ馬鹿にするような発言をしたり、助け合えなかったりするのでしょうか。

私は小学三年生のころ、福祉体験をしました。ゴーグルやおもり、耳せんもつけました。ろう下から教室に戻るまで、どれくらいの時間がかかったでしょうか。視界は白く、体は重く、指示は上手く聞こえなく、とてもしんどいと思いました。あれが日常だとしたら、とても悲しく、私なら早く死んでしまってもいいくらい苦痛でした。

ですが、そんななか仕事をしている人もいれば、普通に生きている人たちがいるわけです。これはとても素晴らしいことではないでしょうか。私はすごく輝かしいと思います。そんな素晴らしい人たちが汚しているのが同じ人間だと思うと、じつとしてはいられません。

私が小さいころは祖母がいました。祖母は東日本大震災のときに倒れてしまい、危うく命を落とすところでした。しかしそのことがあってから、足が動かなくなっていました。数週間たつてから、祖母を家で介護することになりました。正直いうと「面倒くさい」とは思っていました。そのころは三才だったので、やんちゃでうるさく、めいわくばかりかけていました。そんなときにふと、どうしてそこまでしてあげるのかという疑問が生まれていました。そう思ったとたんに、将来自分もあなるのか、と違ってしまいました。祖母が他界してしまう

前の日も、両親は最後の最後まで見ていました。私は何もできずに見守っているだけでした。

そんなことがあつてから、自分が祖母にどんなことをしていたのかを知りました。それはおそらく差別でした。私は、自分の家族に差別をしていたのです。そんなことをした私は、罪悪感にかられました。とてつもない後悔をしました。そのままの気持ちで、一年が過ぎました。今になつてもその罪悪感が消えることはありませんが、何かできることはないか、と考えました。

そこで思ったことが、自分が行ってしまった差別のことだったので。今現在でも高齢者には違うあつかいをする若者たちなど、多くの問題が出てきています。それではいけないと考えるのが普通ですが、そう考えない人もいるので、一体どうすればいいのか、と悩んでしまいました。しかし、自分も昔は差別をしていた側だったので、する人の気持ちは少しくらいわかります。そんな自分が急に差別をなくそうというのは、矛盾してしまいますが、結局は、差別をしてはいけないと分かると思います。その理由は、差別をして、何の得もない体験をしたからだと思います。残るのは罪悪感だけだと知ってしまったので、今こうして言えているのだと思います。

あのときの両親はすぐ必死でした。そんな必死な人たちがいるからこそ、命が守られるのだと気づきました。例えもうすぐ死ぬとしても、最後まで見てくれる方が後悔せずに生きていられると思えました。

つまり、平等にいるためには、みんなが同じ人間として支えていかなければならないのです。身近にある死を体験していない人たちもいるので、差別なんて無意識かもしれませぬ。しかし、失ったときにはもう後悔しているのです。そうならないためにも、助け合い、支え合うということが必要ではないのでしょうか。

勇気を出して伝えてみることに

鹿島中学校 三年

出いず水み 珠じゅり莉り菜な

少し前から性別について違和感を感じていた。同じような悩みをもつ人の本を探していたら、「性別に違和感を感じる子どもたち」という一冊の本を見つけた。自分の中で「これなら自分が悩んでることが分かるのでは」と思い、その本を借りた。

読み始めて、自分は「性同一性障害なのでは」と思った。「心と体の性別が違う」女の子が、自分なのではないか、と思った。女っぽい服を着たり、履いたりするのが嫌。髪の毛を結んだり、伸ばしたりするのが嫌。自分のことを「私」と言うのが嫌。その他にも色々なことが書いてあり、それらはよく自分に当てはまった。ただ、その本には、よくある質問として「恋愛対象は？」と、聞かれることとあるが、それは人によつて違うらしい。男が男を、男が女を、女が女を、女が男を。恋愛はさまざまらしい。

あるページから、性別に違和感を感じた子供の体験が書かれていた。違和感を感じるのには人それぞれであるらしかった。自分が違和感を感じ始めたのは、中学一年生の頃からだった。同じ学年で同じ部活の子のことを「いいなあ、好きだなあ」と思った。はじめは友達としての「好き」だと思っていたけれど、その子が他の女の子と話しているところを見ると胸が苦しくなることがあり、自分の中で「恋愛対象は女の子なんだ」と思った。でも、こんな自分がおかしいと思いつつ「自分の恋愛対象は男、男」と言い聞かせながら無理して男の人とお付き合いをしたこ

ともあった。でも、どうしても男の人を好きになれなくて、結局お別れをした。自分に強く言い聞かせても無理だった。そこから誰にも言えないで悩んでる時、姉が家に友達を連れてきた。男の子みたいな見た目。女友達のKさんだった。そこから何度か会い、仲良くなったKさんがある時、

「自分の恋愛対象は女の子なんだ。」

と言った。「あつ。自分も同じだ」と思ったから、自分もKさんに打ち明けた。

そこから、インスタグラムのダイレクトメッセージでよく話すようになり、前よりも仲良くなった。お互いの恋愛相談をして、たくさんアドバイスをし合った。

ふと、自分は、

「まだ親に言っていないんだ。」

と打ち明けた。Kさんに、

「親に言ってみると楽になるよ。言ってもいいと思う。」

と言われ、勇気を出して伝えてみると、自分が思っていたよりも案外好意的に受け入れてくれた。その後、

「いつかは、改名したい。」

とも言ったら、

「貴方の人生なんだから好きにしな。」

と言われた。それがとてもうれしかった。

本には、自分の性別に違和感を感じても、「すぐには親には話せないと思う人は多い」と書いてあった。他にも、いまだに言えていないという人も、案外すぐに言えた、という人も本の中にはたくさんいた。社会の中では、自分と同じ人がいて、でも、自分達に対して否定的な考えを

もつ人もいる。表立って言葉で攻撃する人もいる。その部分において、自分にとって、今の社会は、優しくない社会だ。

ひとりじゃない。仲間がいる。それは、すごく気持ちが悪くなることだった。心の中に蜘蛛の巣みたいに張り巡らされていたバリアが、「サーツ」と解けたような感覚。自分が今まで悩んでいたことが、他の人も悩んでいる。自分だけじゃないんだ。悩んで、辛い思いしてるのは…。自分には居場所があるんだ。そう思えた。

「自分も頑張ろう。いや頑張らなくてはいけないんだ」と思うことができたのは、自分自身を否定せずに受け止めてくれた人たちがいたからだ。しかし、何かに「違和感を感じる子どもたち」は、たくさんいるのかもしれない。本の中で出会った人達と、あるがままの自分を受け入れてくれた人たちに、助けられ、支えられ、勇気もらった。性別だけではない。あらゆることを勇気づけられるために、まず自分がそういう人になりたい。

もつと知ってほしい

大野中学校 三年

小 こ 埜 ばな 哲 さと 史 し

僕は、車椅子について一つ感じるがあります。それは、車椅子を使用している人を無意識に見ているということです。

僕は、去年の夏に病気がかかってしまい、車椅子で生活することになりました。初めて乗るときは、自分で歩かなくても移動ができると思いい、少し楽しみにしていましたが、乗っていると感することがありました。それは、周りの人にジロジロ見られるということです。これは、小

さい子だろうが大人だろうが年齢は関係ありません。買い物に行くときは、毎回いろんな人に見られて、いつも下を向きながら車椅子で移動していました。なぜこんなに見られるのだろうか、と悩みをもっていました。僕は、人に見られてうれいという人は少ないと思います。だから、この作文を見て、より多くの人に、車椅子の人をあまり見ないでほしいということ伝えたいです。

次に、僕は車椅子をやめて杖を使うことになりました。杖を使っても、見られることはあまり減らなかったですが、もう一つ感じることはありません。それは、歩いているときに普通の人と歩くようにしないでほしいということです。これは、ペースを合わせてほしいということではなく、少し距離をとって歩いてほしい、ということでは

車椅子を使っているときは、周りの人も気を遣ってくれて、少し距離をとってくれるのですが、杖で歩いていると、周りの人は、普通の人と歩くときと一緒の感覚で歩く人が多かったのです。杖を使い始めたということは体のコントロールは多少はできるのですが、僕みたいに、体が痺れていたりすると、まだ不自由な面もあったり、杖も少し体からはなした位置でついた方が楽に歩くことができましたので、他の人と歩く幅が狭いと、歩きにくくなってしまふのです。

このように、車椅子を使ったことがある人や、杖を使ったことがある人は、少なからず体験したり、感じたりしたことがあると思います。だからこそ、まだ車椅子や杖を使ったことがない人や、今はもう普通に歩けるといふ人は、体が不自由な人たちに優しく配慮してほしいのです。

僕個人の意見ですが、車椅子や杖を使っている人は、使いたくて使っているのではなく、体のどこかが不自由で、使わざるをえないという人が多いと思います。さらに、一人一人に悩みなどもあると思います。だから

こそ体が不自由で苦しんでいる人が、周りの環境でまた悩まされるのではなく、この僕の実体験をもとにした意見をより多くの人に知ってもらい、みんなでも一つでも悩みなどを減らしていきたいです。今は、高齢化が進んでいて、車椅子や杖を使う人も増えると思います。ですから、より多くの人の悩みを減らせるようみんなでも明るい未来を作っていきたいです。最後に、僕は中学二年でこのような体験をできてよかったです。でもそんな自分を支えてくれた家族や友達、周りの人にこの作文を通して感謝したいです。学校行事ができなかったり、友達と一緒にいらなかったりして、自分がなんでこんな風になってしまったのかと嫌になったこともあったけれど、みんなのおかげで立ち直ることができて今の自分があります。

「ありがとう。」

優 秀 (高等学校生の部)

親切とは

鹿島高等学校 一年

小野寺 里 桜

私は、常々考えている。どんな行動、どんな言葉が人にとって一番の親切になるのだろうか。

あるテレビ番組で、青年がバスの席をおじいさんに譲ると、そのおじ

いさんが、

「私がそんなに老人に見えるというのか！」

と怒鳴っているシーンを見た。一般的には、その青年の行いはとても良いことなのに、人によってはその行為自体が相手を不快にさせてしまった。そう考えると『親切にする』というのは、する側の自己満足になっ
てしまうのではないだろうか。

しかし、その後の展開で青年はおじいさんに向かって言った。

「僕は貴方がご老人に見えたから席を譲ったのではなく、貴方が僕にとつて人生の先輩だから席を譲ったのです。」

それを聞いたおじいさんは納得した様子で、青年が譲ってくれた席に誇らしげに座った。これを見た私は会話の中に一言足すだけで、険悪だった空気を和ませることができたのかと驚いた。そして、相手のことを思う気持ちは言葉にしないと伝わらないことがあるのだと気付いた。それに加えて、おじいさんが青年の行動を悪意と受け取ってしまったことから、私は人からの好意はしつかり受け取るべきなのだと改めて感じた。

また、ある話が私の脳裏をよぎった。それは、知人から聞いた話で視覚障がいのある人に関するものだった。その知人は、目の見えない男性を駅のホームで見かけ、声をかけた。

「何か私に手伝えることはありますか。」

すると彼は、

「電車に乗るまで肩を貸して頂けますか。」

と言った。そこで知人は、以前ボランティア講座を受けていたので横に寄りそうように歩いたそうだ。実際、歩くとき手助けをしたい気持ちで、目の見えない人の手を引っ張ってしまう人も少なからずいるように、それは却って相手を不安にさせてしまうらしい。だから、そつと寄

りそつて支えることが大事なのだ。こういった知識というのは、行動に移そうとする前から事前にもっておいた方が良いだろう。なぜなら、自信をもって『困っている人を助けたい』という気持ちを行動に移すことができるからだ。困っている人がいても手をさしのべるのは、勇気がいることだ。正しい知識をもっていれば、その一歩を踏み出すことができ、親切は習慣化するだろう。思いやりというのは、知識をつけることから始まるのではないだろうか。

「親切とは、どういうことなのだろう。」

当たり前のことのようにも思えるが、他人に親切にするのは意外に難しい。私は『親切』という易しくも難しくも捉えられる自分の疑問に加え、今までの自分の行動について改めてよく考えた。どんな行動も、良いようにも悪いようにも受け取ることができてしまう。気持ちというのは誰にも見えないものだ。だからこそ、思いやりを行動だけでなく、言葉や表情で伝えることが大事なのだと思う。また、その行動には正しい知識が必要だと考えた。私は、これからもより良い社会、明日の為に、日々学習をし、困っている人に手をさし伸べていきたい。

今の私たちにできること

鹿島高等学校 二年

根本大輝

最近、この世の中では、新型コロナウイルスが流行っている。新型コロナウイルスは、感染力が強くてどんどん感染者が増えている。そして長い間自粛生活が続き、なかなか思うようなことができず、生活が制限されている。さらに、この新型コロナウイルスが流行っていくと差別とい

う人権問題が増えてきている。この問題が現在、最も深刻化している問題なのではないだろうか。もちろん差別はどんな世の中でもあつてはいけないものだと思う。高齢者差別、障がい者差別、人種差別。どれもこれも、この世界中で起こっていると思うと心が痛む。

ある日、新型コロナウイルスが流行りはじめた時に、ある高校の生徒が学校を休んだというニュースを見た。クラスでは、

「コロナじゃない？」

と言ったり、咳をした人に対して、

「コロナだ！」

とからかい、笑ったりしている。からかわれた人も笑っている。こうやって少し具合が悪い、欠席しただけで差別するような言葉をあびせられる。言われた本人は、その一瞬で傷つくと私は思う。

「言葉」というものは、人の心に簡単に傷をつけることができる。自分分は相手を傷つける気はないのに、勝手に口からポロポロと言葉が出て、いつの間にか、知らないうちに相手を傷つけてしまうことだってある。「いつの間にか」、「知らないうちに」、言葉は、簡単に人を傷つけてしまっても怖いものだと思はれる。

この差別が言葉だけでなく、欠席した人や咳をしている人を避けるなど、行動に移ってしまったら、相手の心にさらに深い傷が残るだろう。

このような、行動での差別によりおこった問題の例がある。新型コロナウイルスに感染したと思われる職員が働いていた銀行の窓ガラスが割られていたという問題だ。これを見た時、私はこう思った。なんでこんなことをするのだろう、何の意味があるんだろう、と。テレビではいつものように新型コロナウイルスの話題が続く。このような悲しい問題も度々見聞きする。見聞きする度に心が痛む。

私は、ふと思った。もし、「差別をなくすためにはどうすればよいですか？」という質問をされたら、考えこんでしまうと思う。今までは、「差別はしてはいけない。なくしたい。」とまでしか考えていなかった。先日、朝のテレビニュースでも言っていた。「絶対に、差別のないようにしましょう。」私たちは、ここでとまっていると思う。このような朝のニュースで全国に呼びかけるのも一つの手だと思う。しかし、「差別をなくそう、なくしたい。」と呼びかけはできていても、結局口だけになっているのではないかと私は思う。そこで、私はニュースなどをきっかけに家族や友人と差別について話し合ってみることが大事だと考えた。話合いというのは一人の力ではなく、皆の力で物事を解決することができる。

友達と遊びたくても遊べない。自粛により生活が制限される。でもそんなときこそ、辛いのは自分だけではないということを考え、差別について考える時間を作ってほしい。そうして、生まれもった自分らしく生きる権利「人権」を守ってほしい。

コロナによる人権問題

鹿島高等学校 二年

山本美羽

最近、新型コロナウイルスが人々に影響を及ぼしています。そのコロナとともに、医療従事者やコロナの影響を受けやすいタクシー運転手などへの差別やいじめが社会問題として挙げられています。私は、なぜコロナに負けないように助け合わなければならない時に、このような差別やいじめが起こるのか大きな疑問をもちました。

調べて分かったことは、コロナによる恐怖から生まれることが多いという事です。一例として、コロナと闘っている看護師さんに対して、他の人から子どもを保育園に通わせないで、と言われたということがありました。私はこの言葉を聞いたとき、コロナに対する恐怖よりも、一瞬だけ人に対する恐怖の方が強くなった気がしました。他にも、感染者の自宅に石が投げ入れられるなど、コロナによる差別やいじめの事例は数多いことを知りました。また、実際に私が経験したこととして、先日私の祖母にがんが見つかり、病院に行かなければいけないということを友人に話したとき、病院に行くなら、コロナにかかってしまう可能性があるあるので、帰ってきたら一週間ほど家にいたほうがいいのではないかと提案されました。私は、遠回しに「来るな」と言われているようでショックを受けました。直接病院の中へ私が入るわけではないと説明をしても、恐いからと言ってそのような言葉を言われました。コロナウイルスは人々の体に影響を及ぼすだけでなく、人々の人間性にも関わってくると思い知らされました。私はこのようなことが起こるのは、コロナウイルスに対して、一人一人が正しい知識をもっていないからだと考えました。調べた結果、正しい知識をもっていると自信をもて言えない人が大勢いることが分かりました。私も、いざ正しい知識をもっていると自信をもて言えるかと聞かれても、「はい」とは答えられないと思います。正しい知識をもていないと、過度に不安や恐怖を抱いてしまいい差別やいじめなどを引き起こす原因となってしまう、コロナウイルスではなく人間に追いつめられる人が多く出てくると思いました。しかし、それだけ考えればよいというわけでもないと思います。

私は次に、本当に恐れるべきものは何か考えました。今の状況はどちらかといえば、コロナウイルスが悪いのではなく、人が悪いというよう

な状況になっていると思います。感染者でもないのに、ひどい言葉を浴びせられ、傷つき不安をかかえている人や、コロナウイルスと闘っているのにもかかわらず、差別され続けている人もいます。本当ならば一人一人が助け合い、コロナウイルスに負けないよう、予防を徹底しているはずなのに、なかには自分自身が予防せず一番危険な状況にいるにもかかわらず、闘っている人を差別するような人もいます。私たちが今行わなければならないのは、差別することでもない、いじめることでもない、人を責めることでもなく、コロナウイルスとどう闘うべきなのかを考えることです。本当に恐れるべきなのは、人ではなくウイルスだと私は思いました。差別により人権を無視することは、コロナウイルスに負けたといっても過言ではないと思います。もし、自分が感染したときに差別やいじめを受けたらと考え、他人事ではなく、自分事として捉えることが必要な、と私は思いました。

このようにコロナによる人権問題は、多数発生しています。この先コロナウイルスに負けないためにも、誰もがこの問題にきちんと向き合い、お互いを大切にしながら生活するために、どう生きなければならないかを考えることが大切だと思います。これからは、私も人権問題を重く捉え、たとえコロナウイルスが収束したとしても、忘れず意識しながら生活していこうと思います。



【佳作入選作品】（小学生の部）

たいせつないもうと	波野小学校 一年	大	川	莉	乃	チャレンジドチア	中野東小学校 三年	杉	朱	莉
たすけあい	鹿島小学校 一年	木	村	翠	翠	わたしにできること	波野小学校 四年	大	川	紗
わたしのおじいちゃん	高松小学校 一年	河	野	知	怜	高齢化社会に思うこと	鹿島小学校 四年	三	橋	蓮
ぼくができること	大同東小学校 一年	立	花	空	潤	初めてののおるすばん	平井小学校 四年	黒	澤	未
わたしがみんなにできること	中野西小学校 一年	日	吉	初	衣	相手の心を考えよう	大同東小学校 四年	悉	知	柑
かぞくのたすけあい	波野小学校 二年	永	井	くる	み	まちなかのバリアとバリアフリー	豊郷小学校 五年	高	須	瑞
わたしが今できること	鹿島小学校 二年	中	馬	亜	依	わたしの見たボランティア	中野東小学校 五年	甲	把	敬
わたしのしあわせ	高松小学校 二年	雨	貝	奈	柚	福祉	平井小学校 五年	加	勢	陽
思いやりとたすけあい	平井小学校 二年	萩	原	南	美	交通安全と思いやり	三笠小学校 五年	徳	田	陽
かぞくみんなでたすけあい	大同西小学校 二年	沼	田	愛	愛	やさしくするってどんなこと	中野東小学校 五年	甲	把	敬
むげんのか	波野小学校 三年	内	田	絢	也	福祉体験で学んだこと	中野西小学校 五年	袴	塚	大
たすけあい	波野小学校 三年	高	野	禪	禪	ちがうからこそ価値がある	豊郷小学校 六年	安	藤	亜
ぼくのおばあちゃん	高松小学校 三年	松	浦	マ	シ	大切な宝物	豊津小学校 六年	浅	間	柊
たすけあい	平井小学校 三年	秋	山	姫	愛	支え合うことの意味	平井小学校 六年	鈴	木	栄
						ぼくのとのおおばあ	三笠小学校 六年	木	内	朝
						そばに居るだけで安心する	大同東小学校 六年	立	石	瑛
							中野東小学校 六年	杉	百	々
								果	々	果

【佳作入選作品】(中学生の部)

自分の身近にある福祉	鹿島中学校	一年	吉野の香至郎
LGBTについて	鹿野中学校	一年	二宮志帆
障がいについて	鹿野中学校	一年	松本小幸
障がい者の差別	平井中学校	一年	稲村歩華
食べ物を捨てない社会に	平井中学校	一年	福井萌禾
僕の大好きなおばあちゃん	大野中学校	一年	大原諒士
思いやりの先	高松中学校	二年	島田心羽
社会のために	高松中学校	二年	根本結菜
後悔からうまれたもの	鹿野中学校	二年	石上琴葉
私のひいおばあちゃん	大野中学校	二年	鬼沢絢乃
命があることに感謝する	鹿島高等学校 附属中学校	二年	本田和佳
感謝を込めて	高松中学校	三年	田中葵
多様な世の中で	鹿野中学校	三年	佐藤瑠美
コロナウイルスで学んだこと	鹿野中学校	三年	重戸侑夏
認知症の曾祖母と関わって	大野中学校	三年	堀井遥

【佳作入選作品】(高等学校生の部)

私の考える福祉	鹿島高等学校	一年	宮沢優香
私の家族	鹿島高等学校	一年	加納莉緒
障がいについて	鹿島高等学校	一年	松田音色
特別扱いは良いことなのか	鹿島高等学校	一年	望月大海
優しさの連鎖	鹿島学園高等学校	一年	手嶋紀南
私にとっての幸せ	鹿島学園高等学校	一年	森小暖
思いやりとはなにか	鹿島高等学校	二年	梅崎沙彩
さまざまな介護	鹿島高等学校	二年	植田朱莉

児童生徒福祉作文応募数

●小学校

学 年	応募数
1 年	89
2 年	102
3 年	112
4 年	159
5 年	160
6 年	175
合 計	797

●中学校

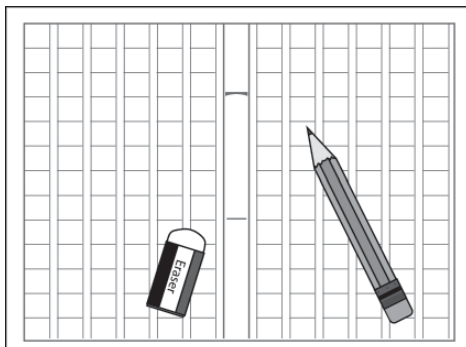
学 年	応募数
1 年	227
2 年	80
3 年	59
合 計	366

●高等学校

学 年	応募数
1 年	162
2 年	141
3 年	0
合 計	303

●応募総数

小 学 校	797編
中 学 校	366編
高 等 学 校	303編
合 計	1,466編



あとがき

コロナ禍の不自由な生活が続いているなかにもかかわらず、市内小・中・高校、1466名の児童生徒の皆さんが、福祉作文に応募してくださいました。審査委員一同感激しております。よりたくさんの方に応募していただくことが福祉の輪を広げていく上で大切なことと考えております。

すべての作品について審査できれば良いのですが、各校の一次審査を通過した作品について9名の審査委員で時間をかけ、丁寧に審査を行いました。学年が進むにつれ、テーマへの迫り方も、身近な家族から社会生活、さらには青年期の自己との向き合い方など、多様化し内容の深まりがみられました。どの作品も読む程に作者の人物に感動させられ、心が温かくなりました。審査の過程での審査委員の声を紹介いたします。

- 家族のなかのふれあいが人間的ですばらしい。
- 前向きな考え方に触れられ、刺激をいただいた。
- 児童生徒に福祉についての理解が深まり、実践力がついていることがうかがえる。
- 中高生の作品は表現が豊かで、内容・テーマが時代背景をよくとらえている。
- 実体験をととした具体的で内容のある作品が多い。
- この作品を同年代の方に是非読んでいただきたい。

実際に福祉作文を書くことはなかなか難しいことです。今回の福祉作文のテーマに沿って、材料を集め、自分の題を決め、考えを深め、書く順番を決めるなど、大変だったと思います。書いていく流れは人によって様々ですが、その過程で自分の考えが深まり、たすけあい・ささえあい・ふれあいの精神が自分の生き方としてイメージできたのではないかと考えます。

児童生徒の皆さんが真摯にとらえた福祉の心が多くの方に共有され、明るいまちづくりに結びついていくことを願っております。次年度もたくさんさんの児童生徒の皆さんの応募をお願いいたします。

最後になりますが、校務多忙のなかご協力いただいた学校の先生方、子どもたちを健やかに育てられている保護者の皆様、福祉作文の事業に献身的に関わってくださいました鹿嶋市教育委員会・鹿嶋市社会福祉協議会の方々に深く感謝申し上げます。

審査委員長 本田敏尋

児童生徒福祉作文審査委員

- 本田敏尋 元中学校校長
- 山本安生 鹿嶋市身体障害者福祉協議会
- 細矢弘子 鹿嶋市ボランティアセンター運営委員
- 糸川康子 民生委員児童委員（主任児童委員）
- 吉田いさ子 鹿嶋市読書団体連合会
- 日向寺恵美 鹿嶋市食育クラブわかば会長
- 大里恵 三笠小学校教頭
- 内芝秀美 鹿嶋市青少年育成市民会議会長
- 柏葉令子 中野西小学校教諭

（順不同・敬称略）



第41集
児童生徒福祉作文集
令和3年度（2022年2月）

編集・発行 社会福祉
法 人 鹿嶋市社会福祉協議会
後援 鹿嶋市教育委員会

〒314-0012 鹿嶋市平井1350-45（鹿嶋市総合福祉センター内）
TEL 0299-82-2621・FAX 0299-83-0242
ホームページ <http://www.sopia.or.jp/k-shakyo/>
Eメール k-shakyo@sopia.or.jp

この事業は皆様から寄せられた赤い羽根共同募金の分配金によって運営されています。